
ナミノート NAMI-note

波崎ナミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナミノート NAMI-note

【Zコード】

Z5562Z

【作者名】

波崎ナミ

【あらすじ】

「ラノベ版『バクマン』を目指そう。ボクたち一人で」

アマチュア作家・波崎ナミとイラスト担当のまりんは、自作の小説サイト『NAMI-note』でライトノベルを掲載していた。高校進学後、初めて顔を合わせた一人は文芸部を設立し、『NAMI-note』のコンビ同時デビューを目指す。

ナミの初恋、まりんの過去、デビューと挫折。

一緒に過ごすうちに、二人の関係にも変化が起き始めて……。

目指すはライトノベル版『バクマン。』！

高校生作家とイラストレーターのコンビが紡ぐ、サクセスストーリー

！！！

【 note title】（前書き）

週刊少年ジャンプで連載中の人気漫画『バクマン。』、最高です。
主人公が最高なだけに。

大好きな作品を目標に書いてみます。

二次創作ではありません、ごめんなさい…

現実はこの話のようにうまくはいかないでしょうし、作者自身は作
中の主人公ほど文章が上手ではありません。が、夢見ることも大切
でしょう。…たぶん。

『不定期更新』になりますので、ちゃっちゃか読みたい方、ご容赦
を。

また、誤字脱字の指摘や感想、評価など、ざじざじお待ちしてお
ります。

【 note note 】

その出会いは偶然だった。

五月、ゴールデンウイーク最終日。就活を一休みして、大学四年生の柚木文音は朝からパソコンの画面に向かっていた。

昨日、買いだめしてあつた小説や漫画をうつかり全て読み切ってしまったのだが、外はあいにくの雨だ。出かけたくない。そのため「たまにはネットもいいか」と小説サイトを片っ端から渡り歩いていたのだった。

規模が大きな投稿サイトでランキング上位の作品を速読で読みあさった。高評価を得ている作品はやっぱりおもしろい。だが、サイト全体で「主人公チート」「異世界トリップ」「転生」が目につく。そうなるとどれも似たり寄つたりな感じがってきて、文音はそのサイトを離れた。恋愛ものとか読みたいな。

検索欄にキーワードを打ち込む。「ネット小説」「恋愛」「おすすめ」

ランキングのサイトを開き、官能小説を除外して上位からリンクをチェックしていく。

そして、そのサイトにたどり着いたのは匂過ぎ。食後の紅茶を口元に運びながらリンクをクリックすると、運命の出会いが待つていた。センスを感じるトップページにサイト名が表示される。

『NAMI-note』

「ナミノート？」

咳き、マグカップを置いて、文音は『Enter』をクリックした。壁紙が墨線入りのノートに変わる。一番上にサイト名『NAMI-note』、少し下の左側にメニューが並んでいる。真ん中に

は『今月の一枚』と題されたイラストが大きく掲載されていた。何気なく目をやつて、息をのむ。

それは、妖精の美少女を描いたイラストだった。

透き通るようなブルーで描かれたロングヘアの妖精 ウンディーネだらうか。裸身を覆うのは水のベールだけだ。澄み渡った水をたたえた池の中に立ち、夜空に浮かんだ満月に向かって両手を伸ばしている。降り注ぐ冷たい月光が透明な水をまとった曲線を伝い落ち、その姿にさらなる透明感と妖艶さを与えている。

透き通るような、水彩画風の絵 。

「きれい……」

思わず心を奪われてしまふイラストだった。ほかにはないのか左のメニューに目をやると『Novels』の下に『Galley』がある。だが、文音は小説を読もうとしていたのだったと思ひだした。イラストは後で見ればいいか。『Novels』をクリック。

「おっ」

『短編』六作、『連載中』一作、『完結』一作、合計八つのタイトルが並んでいた。その中でも、完結されている一作品が目に留まる。タイトルはルビ付きで、『^{ウンディーネ}水妖の初恋』

予想通り『今月の一枚』はウンディーネだと確信した。透明感のある水彩画タッチの絵 あのイラストがこの作品を題材にしたものだとしたら、きっとこれも素晴らしい作品に違いない。

読んでみたい。文音はむくむくと膨らんでいく期待を胸に、そのタイトルをクリックした 。

文音は感嘆の溜息をつくと、背もたれに身体を預けて目を閉じた。細い指先を目元に伸ばし、長時間液晶を凝視していたために疲れた両目を揉みほぐす。まじりに溜まっていた涙が一粒、頬を伝い落ちたが、先ほどからずっと泣いているので今更気にはしない。

気がつけば、最後まで一気に読み切っていた。雨天のせいもあり窓の外はすでに暗くなっている。お腹が減っているし喉も乾いた。トイレにも行きたい。今まで生理的な欲求すら忘れてしまつほど、物語に夢中になっていた。

『NAMI-note』に掲載されている小説の作者は管理人の『波崎ナミ』。彼女の純粋で透明でみずみずしくて、時折きゅっと胸を締め付けてくる切なさがある物語には不思議な？引力？があった。まるでキャラクターの人生を追体験しているかのような、心の深いところに響いてくる言葉の数々がそこにはあった。

そして、その小説に花を添えているイラスト。イラスト担当の『まりん』の絵は、最初に文音が惚れたウンディーネ同様、水彩画タッチの透明感あふれるものだった。

二人のストーリーとイラストは相性がピッタリで、ひとつつの優れたライトノベルとして出来上がっていた。

「……ぐす」

ようやく泣きやんだ文音はティッシュで涙を拭い、もう一度画面を見つめた。最後をしめくくる『まりん』渾身のイラストが映っている。胸にはまだ甘くて切ない痛みが後を引きずっていたが、文音の泣きはらして赤い瞳には、ひとつの決意が揺らめいていた。

この作品は、ううん、この一人の作品は全部、もっとたくさんの人には読んでもらうべきよ。

これこそが、柚木文音が編集者を志したゆえんである。
だが、彼女と一人が実際に出会うのは、まだ少し先の話。

【title・入学式】

南校舎一階の廊下には春の日差しが足りず、昼間なのにほの暗い。入学式の活気に盛り上がる学園の中、ここだけ見えない壁で隔絶されているかのようだ。奇妙な静寂に響く足音が、ひとり分だけある。先ほど晴香学園に入学したばかりの佐久間凛子は、初々しい制服姿で保健室に向かっていた。片手に自分の通学カバンを提げ、反対には同級生のものを持っている。入学式の終わりに貧血で倒れた生徒に届けるためだ。

初対面の相手だが、だからこそ担任は凛子を選んだ節がある。田舎ゆえに小・中学校からの顔見知りが多いクラスで、引っ越してきたばかりの凛子は戸惑っていた。積極的に級友へ話しかけられないままホームルームが終わってしまい、居心地が悪くて早々に教室を出たところを担任に捕まえられた。

「さつき倒れちゃった子、いたでしょ？　ひとり暮らしで保護者の方もいらっしゃらないから、まだ保健室にいるの。よかつたら、鞄を届けてあげて？」

「え……喋ったこともないのに、ですか」そもそもどんな子か覚えていなかつた。「なんであたしが……」

「大丈夫大丈夫！　入試の時に面接したけど、すごくいい子だったから覚えてるの。佐久間さんも、きっとすぐに仲良くなれるわ」

「……わかりました」

保健室の前で立ち止ると、凛子は一度両手の荷物を床に置いた。ここまで来たのはいいが、やはり緊張する。荷物だけここに置いて帰つてしまおうかとも考えるが、それはあまりに無責任だ。……行くしかない。

凛子は覚悟を決めてドアをノックした。受験の時の面接を思い出

す。若い女性の声ですぐに返事があった。「どうぞ」

「失礼します」ドアを開け、鞄を一つ持つて入る。「一年二組の佐久間凜子です。ええと……名波くんの荷物を届けにきました」

「きみも新入生か。お疲れ様」

デスクに向かつていた女性が、くるりと丸椅子を回して振り返った。身体のサイズにぴったりな白衣をまとい、長い脚を組んでいる。理知的な雰囲気に眼鏡がよく似合っている、マンガやラノベから抜けってきたかのような美人養護教諭だ。豊かな胸のあたりに縫い付けられた名札に目が留まった。

「一之瀬先生、ですか」

「ああ、一之瀬春実だ。二十四歳。スリーサイズは
「けつ、けつこうです……」

凜子は両耳を手でふさぎかぶりを振った。本人の口から聞かずとも、春実が理想的なプロポーションであることは見てとれる。うらやましい。特にバストとか……。

うらめしそうに自分の胸元を見つめる凜子に、春実は苦笑して言った。「小さいのも需要はあるぞ」

「小さくなんかつ……あるかもしませんけど！ これから大きくなるんです！」

「まあ成長期だからな。余計なダイエットには気をつけなさい」春実は丸椅子から立ち上がり、ベッドとこちらを仕切つているカーテンに歩み寄った。薄いクリーム色のカーテンを開けながら呼びかける。「名波。可愛い女の子が鞄を持ってくれたぞ」

か、可愛い……！？ 「ななな何言つてるんですかあ！！」

「冗談だ佐久間。落ち着け」

「……冗談つて……何気に行なしてませんか、それ」「言葉の綾だから気にするな」

「……うう」

春実は適当に凜子をあしらひとベッドの傍から離れた。「せっかくだから一人とも、少し話したらどうだ？ まだ喋ってないんだろ

「う

提案されて、凛子は迷った。クラスメイトと話せるのは嬉しいが、相手は男子生徒だ。こういう特殊なシチュエーションで男の子と話すなんて恥ずかしい。あたしつて、なんて自意識過剰……。

凛子は頬が赤くなつてないことを祈りながらベッドを見た。優しげな外見の少女が上体を起こしている。少年ではない。？美少女？だ。

「え」

きめが細かく滑らかな肌は、全裸で雪景色に立つたなら見分けがつかなくなるであろう、いつさいの穢れがない、透き通るような白。さらさらのショートヘアは色素が薄い。スッと通つた鼻筋と薄桃色の唇。華奢な身体は全体の色の薄さも相まって、触れたら溶ける淡水のような儂さを感じる。

？整い過ぎた？外見の美少女は、眠そうに目をこすりながら凛子のことを見た。髪と同じで色が薄い大きな瞳に視線が吸い込まれる。見惚れて言葉を失くした凛子より先に、美少女が口を開いた。

「はじめまして……だよね」おつとりとした口調で名乗る。「ななみ名波岬さきです」

「凛子、です。佐久間凛子」

「さくまりん」……？」

美少女は「んう？」と小首を傾げた。ぽつりと声を眺めたまましばらく動きを止める。

「名波さん？ どうしたの？」

「……ん。なんでもない。鞄、持つてきてくれてありがとう、佐久間さん」

控えめに微笑んで、岬はベッドの端に腰かけた。凛子はおや？と思つた。岬はズボンをはいている。やつぱり男子なのか。

「どうした佐久間。名波が男か女かわからないのか？」

「え！ ……いや、そんなことは……」

間違えていたら岬に悪いと思いつつ、本人に確認する。「男の子

だよね……？」

「うん」

正解だ。よかつた……。男装の美少女というわけではないらしい。いわゆる『男の娘』なる存在に遭遇したことは驚きだが、ひとまず安心した。

岬は枕の向こうに置んで置いてあつた制服を身につけた。えんじ色のネクタイと濃緑色のブレザーだ。近隣の学校では他に見られない色とデザインなので、凛子は気に入っている。

穏やかな中性的声で、岬は訊ねてきた。「佐久間さんは、どこの中学校から来たの？」

「あたしは愛知県から引っ越してきたの。だから、言つても知らないと思う」

「そつかあ。引っ越しつて、大変だつたね」

「……まあね。名波さん　名波くんは？　やつぱりこの辺の出身なの？」

「んー、一応。ここは少し街中だけど、ボクが住んでるのはもっと田舎かな。初めての電車とバス通学だから、結構楽しみ」

照れくさそうに言つた岬は、少し表情を曇らせて付け加えた。人が多いのは苦手なんだけどね。

しばらくの間、凛子は岬と談笑していた。春実は一人の様子を見守りながら、時々会話に加わってくる。「二人とも、入りたい部活はあるのか？」

「ボクは特にないです。運動苦手だし……」

「あたしも、部活は別に……」

興味がないわけではないが、今更スポーツをする気にはなれない。春実は「文化部はどうだ」と訊いてきたが、凛子は首を左右に振つた。

「絵を描くのは好きですけど、美術部じゃ自由に描けないから」

「うちには漫研もあつたろう?」

「マンガも別に……ちょっとは興味ありますけど。一枚絵のイラストの方が好きだし……」

「ふうん。名波は興味がある文化部はないのか?」

「部活はあまり入る気がしなくて……。本は好きですが、この学校つて、文芸部がないじゃないですか」

「あつたら入部するのか?」

そう訊かれると、岬は困った様子で形の良い眉を下げた。「わかんないです」

「本とかマンガは家で読めばいいし。ひとり暮らしだから、家の事もしなきゃいけないし……」

「高校生でひとり暮らしは大変だな。名波は女の子っぽいから、ストーカーや強盗には気をつけなさい」

「あはは……それ、お姉ちゃんにもよく言われます」

凛子は、岬がひとり暮らしだと担任から聞いていたのを思い出して、食事も自分で作るのだろう。壁の時計に目をやつて心配する。「もうお昼だけど、時間は大丈夫?」

「えつ、うそ」岬も時計を振り返って、立ち上がった。「ご飯の準備してないよ……どうしよう。買って帰つても遅くなっちゃうし……」

…

岬は急にあたふたとしだした。凛子がお喋りに夢中になつ過ぎたことを申し訳なく思つていると、春実がそつと声をかけてきた。「佐久間は昼食の用意あるか?」

「ないです。帰りにどこか寄らつと思つてるんで……」

「わかった。おい、名波」

春実は慌ただしく帰り支度をしている岬に呼びかけた。

「佐久間が食事に誘いたいらしいぞ」

「勝手に何言つてるんですか!?」

「? なんだ佐久間。実は嫌なのか?」

「い、嫌ぢやないですけど……! なんで会つたばかりの男の子と

……

「ぜひとも名波と一緒に食事したいそつだ。せつかくだから、二人でどこか食べにいったらどうだ。ん？」

女性一人のやりとりを不思議そうに眺めていたが、岬は春実に返事を促されたと言った。「いいの？ 一緒にお昼食べにいつても」長いまつげに縁取られた瞳に見つめられ、凛子は春実に反論した割にはあつたりと頷いた。

「もちろん。坂の下のパスタ屋さんでいい？ 今朝通りかかったときから気になつてて」

「いいよ。ボクも行ってみたいな」

岬は春実に礼を言つて保健室を出て行つた。凛子はそのあとを追う。

ブレザーを羽織つっていても、岬の背中はか細くて少女にしか見えない。凛子が初対面の相手との食事を了承したのは、おそらくこれが理由だろう。女の子にしか見えないから、異性として意識する必要がない。下手に気兼ねせず話せる。

引っ越し後初めての友達が岬でよかつたと思つた。

……あ、初めてじやないか。

もう一人、この辺りに住んでいるはずの友達の名を思い出す。名前といつても、本名とは違うのだが。

あたしが近くに引っ越ししてきたつて知つたら、驚くだろ? なあ。

早く連絡を取らなければならぬ。『NAM - note』の小説担当にして相棒・波崎ナミに。

【title1・入学式】（後書き）

家庭研修ひやつほーう！！

【title2・正体】

凛子は岬と連れだって晴香学園正門を出た。自分たちと同じ新入生で混み合つバス停を通り過ぎて、それなりに急な下り坂を歩く。身長は凛子の方が低いが、岬は歩くのが遅いので彼のペースに合わせて歩幅を小さくしている。

体調が良くなはないせいか岬は少しうらうらと歩いていて、隣で見ていって危なっかしい。大丈夫かな。

内心気にかけていると、野球部やバスケ部の寮の前に差し掛かったところで、並列で走るママチャリが後ろから追い抜いていった。背筋にひやつとした感覚が走り、凛子は岬の手を引いた。「こっち寄つて」

岬は心配されていることになど気付かないようだつた。「どうしたの……？」

凛子はほぼノーブレーキで坂を下つていくママチャリたちを指さして言った。「あんな風に、歩道でも平氣でとばす人たちがいるんだから、気をつけなよ」

「んー？ ほんとだ、危ないねー」

のんきな反応を受けて、凛子は声に出わずに突つ込んだ。自転車に抜かれたのに気づいてなかつたの？

ぱくっと空を見上げながら、たいして興味もなさそうに岬が呟く。

「ねえ」

「……何？」

「手、ちょっと痛いかも」

「……ツツー？」、ごめんね名波くんつ」

凛子は握りしめていた岬の手を慌てて離した。見計らつたようなタイミングでまたママチャリに追い抜かれ、とっさに岬を引き寄せた。後ろを振り返つて安全を確認した後、岬と左右を入れ換わつた。凛子が車道側に立つ。

右手にはまだ岬の手の感触が残っている。さつき保健室で聞いた話では、岬は運動が苦手だという。普段、スポーツなどしないのだろう。岬の手は細くてしなやかで、肌は滑らかだった。

手を握り続けていたのは自分のせいじゃない」と凜子はひそかに抗議した。名波くんが女の子みたいだからいけないんだ。異性として意識しづらい。そのうち慣れるのだろうか、凜子ははなはだ疑問だった。

そういえば、異性間の友情は成立するんだっけ……？

徒歩には少し長く思える坂道が終わると、大きな交差点にぶつかる。目的の店はすぐ左手だった。看板によると生パスタがおすすめらしい。近くの高校生を狙つてか、価格もリーズナブルだった。

店内に入る前、凜子は岬を気にかけた。「大丈夫……？」

坂道を歩くのは足に負担がかかるが、ここまで来るのはそれほど疲れることではないはずだった。しかし、岬は端正な顔に疲労の色をにじませている。膝もふるふると震えていた。

「ん……ただの運動不足だから、平気。早く中に入ろう」

ドアを開けるとチーズやトマトソースの香りが鼻孔をくすぐった。香ばしいパンの香りもする。

平日とはいえ昼食時なので、席はあらかた埋まっていた。晴香学園の制服もちらほらと見受けられる。親が入学式に来たらしく、両親と食事を共にしている者もいた。凜子の両親は仕事が忙しくて見に来れなかつたので、少しだけうらやましい。

そういえば岬はひとり暮らしだった。窓際の禁煙席に座ると、メニューを開きながら訊いてみる。

「名波くんつてひとり暮らしなんでしょう？」「家族は？」

「え……？　ああ」岬は困ったように微笑んだ。「お父さんとお母さんは、だいぶ昔に死んじゃった。今のお家にはお姉ちゃんと住んでたんだけど、お姉ちゃんは大学と仕事で東京に行っちゃって……」

…

「……そうだったの……。ごめんね、変なこと訊いて」

「んーん。変なことじやないよ、家族のこと訊くのは」

注文した料理を待つ間に、岬は自分の姉について語った。頭が良くて東京の国立大学に進学し、ミスコンで優勝したのだとか。姉について喋る岬はこころなしか口調が早口になっていて、声のトーンが高い。白い頬は健康的な赤みを帯びている。

「名波くんは、お姉さんのことが好きなんだね」

「えっ」ストレートな質問に恥ずかしがりながらも、岬は今日一番の笑顔を見せた。「うん。好きっていうか、すごく大好き」

二人は主に、互いの趣味について話しながら生パスタを食べた。岬は歩くのと同様に食べるのも遅かつたので、岬についてたくさんのことを探れたらし、逆に凛子のことを知つてもらえた。一緒に食事するよう勧めてくれた春実に感謝する。

「ごめん。ちょっとお手洗いに」

デザートのブディングを残して、岬がトイレに立った。凛子は用事を思いだし携帯を取り出す。そろそろスマホに変えようか。

メールを打つ。相手は『波崎ナミ』 小説サイト『NAMI-note』で、『まりん』こと凛子がイラストを提供しているアマチュア作家だ。中学一年の三学期からだから、彼女と組んで一年とちょっとになる。だが、実際に顔を合わせたことはまだない。住む場所が離れていたし、二人とも行動力があるほうではなかつたからだつた。

ナミは相当な速筆だが、更新はまりんがイラストを描くペースに合わせている。また、今では継続的にサイトを訪ねてくれる読者を確保するため、短編よりも連載小説に力を入れている。

凛子は件名を打ち込んだ。『重大発表！！』

『ここにちは～、まりんだよ。実はナミちゃんに大事な話があるの。あたしね、最近引っ越したんだよ。どこだと思う？』

驚いたナミの返信を想像して、思わずほほを緩ませて続ける。

『ナミちゃんが住んでる近くなんだよ。晴香学園に通い始めたのー。』

メールを送信したところで岬が戻ってきた。時を同じくしてバイクの音が聞こえる。返信にしては早いと思つたら、岬のスマートホンだつた。

「やつぱリスマホって便利?」

「ん? どうだろ。あまりこだわりないから、わかんない

「ゲームとかしないの?」

「やつたことないかなあ。お姉ちゃんが大学行きながら稼いでくれてるんだから、なるべくお金かけたくないし。これからはバイトもしなきゃ」

「バイトかー……あたしの友達も言つてたな。『高校入つたらバイトする』って」

「この友達とはナミのことだ。更新のペースに影響はないから気にしないでいいと言つていたが。」

着信はメールだつたらしい。岬はふつと画面を一瞥すると、すぐに鞄にしまつた。もう読んだのか、それともいたずらメールの件名を見てスルーしたのか。

「ふふ」

岬は笑っていた。

片頬に手を当ててテーブルに肘をつき、微笑んでいる。色素の薄い大きな瞳が上田づかいに凜子を見つめていた。「……何? 顔にソースついてる……?」

「ううん。そうじゃなくて なんて例えればいいかな」細長いスピーチでブティングをつつきながら、岬は言つ。「たとえば『推理小説を読んでいて、自分の推理通りの展開と結末だった時』みたいに、嬉しさ……? かな」

「？ 共感できなくなるにいけど、何その例え。前に友達も同じように言つてたけど」

と、そこまで口にして、凛子はひとつ可能性に気付いた。
まさか、そんなことあるわけ……。

だつて、いくら近くに引っ越してきたといつても、
この市には政令指定都市に認定されるだけの人口が存在してい
て、

高校なんて周辺にいくらでもあって、

その高校にもたくさんクラスがあるんだから、
たまたま親しくなった男子生徒が『彼女』だったなんて、想像し
ようがない。

凛子は頭を駆け巡った推測に茫然と呟いた。「ナミちゃん……？」
対する岬は、ただ穏やかに微笑んでいる。女の子にしか見えない
少年に向かつて凛子は繰り返す。

「名波くんは、ナミちゃんなの……？」

「んっ」

柔らかなショートヘアを揺らして、岬が小首を傾げた。凛子はそ
れを肯定のサインだと思った。

「改めてはじめまして、？ あく『まりん』じゃん」

「ボクが波崎ナミだよ」

【title 3・文芸部】

「…………んつ、ふ…………は…………はあ」

決して広くない部屋に、岬のあえぎ声が響いていた。岬は息苦し
そうに大きな目を細め、長いまつげが夕陽を受けて影を落としてい
る。女の子にしか見えない？ 整い過ぎた？ 顔を見つめて、凛子が申
し訳なさそうに咳く。

「いきなりごめんね、岬…………痛いところ、ない…………？」

「…………平気、だけど…………」「んなの、はつ…………はじめて、だつたから

…………」

「…………ごめん」

わずかにオレンジがかつた光が窓から差し込んでいる。一人きり
の空間は、春の日差しに満たされて暖かだつた。充分過ぎるほど火
照つた岬の身体には少々室温が高過ぎる。細い首筋を一粒の汗が伝
つた。不規則に乱した息を抑えつつ、岬は懇願する。

「頂戴…………？」

「うん。いいよ…………」

自分の欲求を我慢しながら、凛子は

時は少し遡かのぼる。

帰りのホームルームが終わると、運動部に所属している生徒たち
は一斉に教室を飛び出していく。一年生は部活の準備を任される
から大変だろう。もつとも、スポーツなど体育の授業以外では縁の
ない名波岬には、まったくの他人事なのだが。

運動部たちがいなくなつた教室には、のんきに荷物をまとめてい
る文化部と居残つてノートを広げる生徒たちがいた。居残りに備え
て購買へ買い出しにいくグループもいる。

岬の動きは相変わらず緩慢だった。隣の席に座っている眼鏡の少年と話しながら、教科書とノートを鞄の中に移している。

眼鏡の少年 羽淵が言った。「岬は部活いかねえの？」

「行くよ。でも、凛子もまだお喋り中だから。ボクもハブッチと喋つていいんだよ」

「ふうん

羽淵良平

は、岬が中学生のころからの馴染みだ。不健康そうな瘦

身で、へらへらとした軽薄な笑みをいつも顔に貼り付けている。誰とでもそこそこ仲が良く、そのくせ休日は家に引きこもりパソコンにかじりついている情報通だ。

「佐久間って愛知から越してきたんだろう？　つまく馴染めてよかつたじゃねえの」

「だね」

入学式から三週間が経ち、四月末。この頃になるとクラスの中でもグループ分けがほぼ完了している。同じ小・中学校出身者を中心にして集まっていく中でも、凛子はつまく溶け込めていた。姿勢は可愛いし、それを鼻にかけた様子もなく、性格が良いからだろう。初めは心配していたが、取り越し苦労だつたらしい。

ちらと斜め後ろを振り返ると、凛子は今も級友と何やら盛り上がりしていた。顔を赤くして両手をぱたぱたと振っている。「そそそ、そんなことないよ！」

岬の視線を追つて顔を上げた羽淵がぼそっと言葉を漏らした。「佐久間って可愛いよな」

「ん。そういうえば、ハブッチは小さい子に興味があるんだっけ？」

「口リ？でも？イケるつてだけだ。俺はストライクゾーンが広いんだよ。だいたい佐久間は同じ年だから？合法？だ」

「合法かどうかはわかんないけど……」

佐久間凛子は小柄な女の子だ。さすがに小学生には見えないが、中学生だと言われば信じられる。

同い年の少女たちの中についても、背丈は頭一つ分近く小さい。ボ

ディラインの凹凸は控えめで顔立ちも幼い。本人は気付いていないかもしぬないが、ツーサイドアップにした髪も子供っぽさを助長させている。

ふいに凛子がこちらを振り向いた。と思つたら、どたばたと机の間を駆け抜けてくる。

「岬！」凛子は童顔を真っ赤にして訊ねてきた。「あたしたち？ 友達？ だよね！？」

「？ ん。友達だよ？ どうかし」

「ほらあ！ 岬も友達だつて言つてるでしょー 別に変な関係なんかじゃないもんっ！」

ふくうつと頬を膨らませて、凛子は友人らに訴えた。にやにやと見つめ返される。「はいはい。そんなに怒らないでよ凛子。怒つても可愛いけど」

「…………ううう」

凛子はますます顔を紅潮させて、湯気がたつてているように見間違えるほどだった。あわあわと口元を震わせるが、言葉は出でこない。やつぱり恥ずかしがり屋だなあ……

「ばか

「ふえっ？ ちょ……」

凛子は岬の手首を掴むなり猛然と走りだした。自分の席を経由して鞄を取り、廊下に飛び出す。女の子たちが笑つて言った。じやあね、新婚さん。

「こうして岬は凛子に手を引かれるまま廊下を走り、階段を駆け下りて、文芸部部室に転がり込んだのだった。
「んぐ、ん…………ふは。あー、つかれたあ…………こんなに走ったの初めて」

ダッシュなんて久しぶりにした岬は、凛子からもらつたカルピスウォーターをボトル半分ほども飲み干してしまつた。白く濁つた液

が一粒、口の端から滴つている。

「『ひつねつさま。けつこうう飲んじゃつた……』

「いいよ別に。その……あんなに取り乱したあたしが悪かつたんだし」

軽くなつたペットボトルを受け取ると、凛子は床から立ち上がりた。窓際にふたつ向かい合わせて置いてある席の、いつも使つている方に座る。しばしためらううううに飲み口を見つめてから、カルピスを一口飲んだ。横顔が赤いのは走つたせいか、それとも夕陽のせいか。

「岬はカルピスウォーターのことを知つてる？」

「んー？ 最近見ないけど……確か『カラダにピース』ってやつでしょ？」

「そ。『好きだー！』ってやつ

「それがどうしたの？」

「さつきさ、みんなと話してたら……そのう」凛子は一度言葉を詰まらせた。「あたしと岬が……付き合つてるんじゃないかつて、訊かれて」「ああ……」

岬はよつやく全力疾走させられた理由を知つた。なるほど。岬も時々真偽を訊かれる噂話だが、凛子は恥ずかしさに耐えきれなかつたらしい。

凛子は小さな身体をさらに縮こまらせて問いつてくる。「あたしたち、付き合つてないよねー？」

「ん。ただの文芸部で、ただの仕事仲間

「……だよね……」

凛子はほうっと溜息をついた。なんとなく残念そうに見えたのは気のせいか。

「んじょ」

ブルブルと小刻みに震える膝に力を込めて、岬も床から腰を浮かせた。凛子の正面、ノートパソコンが置いてある席に着く。今日も

『NAMI-note』で連載中の小説『パーフェクト・スケッチ』の続きを書かなければならない。

入学式の日、先に相手の正体に気付いたのは岬だった。彼女の名前を聞いた時点で、凛子が『まりん』である可能性に思い当たった。その後の会話で趣味が『まりん』と同じであることを知り、最後に届いたメールで確信した。

『あたし、ナミちゃんはずつと女の子だと思つてたのに……』

波崎ナミの正体を知った後、凛子は恨めしそうに言っていた。『ボクつ娘じやなかつたの』

岬としては故意に騙しているつもりはなかつたし、特に問題は生じなかつたので黙つていたのだが、凛子は不服なようだつた。おかげで機嫌を取るのに苦労したが、余談である。

誤解が発覚しながらも、かくして初面会を果たした二人は、場所を近くの公園に移して話し合つたのだった。せつかくこんな偶然に恵まれて、同じ学校に通うことになつたのだから、一緒に作品を作りつゝと。

『せつかくだから部活作ろうよ』と凛子が言つた。『「ラノベ部」！』

『それは平坂読先生の作品でしょ……MF文庫』

『じゃあ普通に文芸部！　うちの学校にはまだなかつたよね』

『けど、別に部活がなくたつて小説は書けるし……』

予想外の出会いに興奮していたのは岬も同じだつたが、創部まではしなくてよいのではと乗り気ではなかつた。そんな岬に向かつて、まりん　もとい佐久間凛子はかつてない強気な態度で言い切つた。
『作るつたら作るの！　わかつた？？岬？！』
凛子から初めて呼び捨てにされた。

『「ラノベ版？バクマン。？」て言つたのは、岬でしょっ！』

そもそも『バクマン。』の二人は部活なんてやってなかつたけど
なんてことは岬も言わなかつた。家が離れている一人には、一
緒に活動できる場所がある方がいいのは事実だつたし、岬は部活を
したことがなかつたから少し興味があつた。

こうして岬たちは文芸部を設立することと相成つた。美術室横の大
きめの資材室を部室に借りて、机と椅子は空き教室から一人分だけ持つ
つてきた。

部員は岬と凛子の一人だけだつたが、特に勧誘は行わず、他の部
活のように宣伝のチラシを描くこともしなかつた。ここは『NAM
I-note』のための文芸部だから、無理に部員を増やす必要はない。
入りたい人がいたなら、自分から入部を申し込んでくれたらいい。

直接会つてから一ヶ月ほどしか経つていないが、二人の間にときこ
ちない雰囲気はなかつた。最初こそメールのやり取りとのギャップ
に違和感があつたものの、順調に創作に取り組めている。

「ねえ、凛子」

「…………何？」

『今月の一枚』の下絵に没頭していた凛子は、一拍置いて視線を上
げた。岬はその手元を見やり、感心する。まだ下絵だが、相変わら
ずうまい。

「今回もクオリティ高いね。さすが『まりん』」

「まあね。今回は一つの節目だから、とつておき」

下絵には、写真からイラストを起こした岬と凛子が描かれている。
それから、『水妖の初恋』^{ウンディーネ}と『パーフェクト・スケッチ』のヒロイ
ン。『文芸部設立記念！！』の文字もあつた。

凛子とライトノベルを作り始めた時を思いだした。

「ねえ、凛子」

「今度は何？」

「ラノベ版『バクマン』」を田嶋そつ。ボクたち一人で

「……はあ。何回同じこと言つのよ、ばか。それでも作家の端くれ

? もつといい言葉を見つけなさい」

岬はお姉さん気取りで指摘する凛子に苦笑した。「はあい。最高のお話を書くから、任せて」

目指すは一人同時の新人賞入賞、そして『NAMI-note』のコンビでの書籍デビューだ。

【title・文部省】(後略)

我ながら筆が遅い…

【作中作品紹介1 パーフェクト・スケッチ】（前書き）

作中では名前だけしか出てこなかつたりなので、ちょっとずつ紹介したいです。

あらすじとかわさいな裏設定くらいですが。

あとあと繋がりがあつたり、なかつたり…

【作中作品紹介1 パーフェクト・スケッチ】

題：パーフェクト・スケッチ

作：波崎ナミ 絵：まりん

「被写体があまりに完璧すぎると、画家の技術が劣つて『本物以上』を表現できない」

あらすじ：

美女を描くことに青春を燃やす美術部員・景渡は、ある日『完璧な容姿』を持つ美少女・美姫に出会う。発作のように美姫の姿を描く景渡だが、スケッチは満足のいく出来ではなく、美姫の親友である咲良から変質者として目の敵にされる始末。

しかし、美姫のことを諦めきれない景渡は、彼女が廃部寸前の保育部に所属していることを知ると美術部と保育部を掛け持ちする。だがそれは美術部の後輩・凪子の反感を買い、景渡の保育部からの退部を賭けて勝負することに。

凪子が突き付けた勝負は、地区の夏祭りで展示する絵を同じ題材で描き、どちらが票を得られるか競うというものだった。

題材は『高校生活』

景渡は保育部存続のため協力を申し出た美姫を被写体にするが、途中で大きな壁にぶつかって。

作品情報：

『NAMI-note』――作日の長編小説。連載中。
ナミが中学生の時、美術教師の『美』に対する自論を聞いて思
ついたもの。

絵画の知識や技術についてはまりんに取材している。

【title4・初仕事】

夕日に満たされた部室の窓辺、向かい合わせの一いつの席。苦笑しながら岬は幸せそうだった。「最高のお話を書くから、任せて」

「おもしろそうですねー！」

『NAMI-note』の更なる進化を誓つ声に続いた少女の声は、凛子のものではない。

唐突に開け放たれたドアから、生徒が男女一人ずつ入ってきた。男子生徒には見覚えがある　　というかクラスメイトだった。針金のような瘦身と眼鏡、にやにや笑いが特徴の情報通。岬と一緒にいるのをよく見かける。

「よし、お一人さん」クラスメイトの羽淵良平はいつも以上の薄ら笑いで言った。「お取り込み中だつたかな」

岬がキーボードを打つ手を止めた。「そんなこともなくはないけど……なんでハヅチが文芸部に？　もしかして入部希望？」

「はっ、まさか。俺はただ、文芸部に連れてつてくれつて頼まれただけさ。　つで、ご覧の有様」

羽淵は同行者の細腕で首を絞められていた。男とはいえ羽淵は相当細い。その首をへし折らんばかりに力を込めて、ボブカットの少女が連行してきたらしい。羽淵のにやにやがいつもより酷いのは女子生徒の胸が頬に押し当たっているせいなのか。

「……その人は？」

凛子は穏やかな空気を破られたことに気分を害していた。すねた顔で首絞めボブカットを見据えている。一方、睨まれている側は大変機嫌が良さそうだ。

「はじめまして、文芸部のみなさん。あたしは新沼喜々（にいぬま

れを）つていいます　」

「あたしが何の用で来たかつていいますと実は新聞部の取材でしてしかしなぜ部長であるあたし自らがここまで足を運んだのかといえばですねえ五月第二週発行の校内新聞に部活紹介を載せるため各部に記者を送り込んでいるんですけど新設されたばかりの文芸部は最初取材リストから漏れていたせいで人手が足りなくって仕方なく総指揮官であるあたしくしみが現場に駆り出されることと相成ったわけですよええまあこんなに可愛らしい美少女たちをお田にかかれたんですから全然構いませんけどぐくぐくくくえ

「要約してください！」

止まらないマシンガン・トークにたまらず凛子は声を張った。おびえる岬を後ろにかばって仁王立ちし、よだれを垂らして接近しつつある喜々の正面に立ちはだかる。こんなおかしな人を岬に近づけてはいけない。

「……むう。心配しなくても食べたりなんかしませんよ」喜々は両手を挙げてひらひらと振る。「つていうかあたし三年生だし？ 別に敬語じゃなくていいよね？ いいんだね。おっけーブラジャー」「げほっごほ……なかなか素敵なお姉さんだろ？」

ようやく解放してもらつた羽淵はせき込みながらも口の端を吊り上げた。マゾの気があるようだ。

「素敵かどうかはともかく」凛子はいまだ警戒を解かずにしてる。「そんなにツンツンしないでよう。ね？ 後ろで震えてるきみも、

怖がらないで」

「用件は？」

「……はあ。一応さつきも言つたんだけじか、あたし新聞部の部長なの。つで、あなたたち文芸部の取材に来ましたー」

一の腕に着けた『新聞部』の腕章を見せられて、凛子はうなつた。

「取材？」

喜々が言つ。「部活紹介の記事を書くの。新設したばかりで部員少ないでしょ？ 宣伝にもなるよ」

凜子は岬を振り向いた。岬は戸惑いの色を顔に浮かべている。あたしも同じ表情をしているのだろう。

凜子も岬も、これ以上の部員はいらない。入りたいと言われれば拒まないが、こちらから誘いはしない。二人はこのことを喜々に伝えた。

岬が控えめに言つた。「だから、申し訳ないですけど……ボクたちの記事は書いてもらわなくていいんです。わざわざ部室まで来てもらつたのに、すみません……」

「いやいや、そんな謝らなくても」羽淵のにやけ癖が移つたのか、喜々はにぱつと微笑んだ。「まだ話は終わつてなくてね。もうひとつ、あるんだ。今度は依頼なんだけど」

「依頼？ ですか……」

「そ、依頼。お仕事の……」

一瞬のことだったが、喜々がスウッと息を吸い込んだ。凜子はなんとなく直感した。またか……。

「まあ仕事でいつても水商売じゃないから安心してよそもそも薄汚い男どもにきみらをくれてやるくらいなら一人まとめてあたしがお持ち帰りしてやんよジユル……脱線しかけたけど話を戻すねええつと何だつけそうそう依頼だよ小説の依頼！」

「本題を言うまで長いですね」

「よく言われるよん」

凜子の咳きを気にした様子もなく、喜々はポケットからくしゃくしゃになつた紙切れを取り出した。ほら、これと向かい合つた机の境に置く。興味を持つたらしく近づいてきた羽淵が歓声を上げた。「へえ！ 校内新聞に小説を載っけんのか。ちょっとすげえじ

やん

紙には『締切…GW明け 短編（？）』とある。凜子は思った。全校生徒に配布される校内新聞に小説を掲載してもらえば、そこで獲得した読者に『NAMI-note』も閲覧してもらえる可能性がある。これはチャンスだ。

「ね、岬はどう思う？」「これ」

「んー……。あのう、喜々さん」

「なあに？」

「短編の後に（？）つてあるんですけど……短編じゃなきゃダメですか……？」

「ど、どうど？」

「連載小説を書きたいんです」岬はパソコンの画面を喜々に見せた。「いつもこのを考えてあるんですけど……短編じゃなきゃダメですか？」

画面にはメモ帳が表示されていた。一番上にタイトルがある。凜子も初めて見る題名だった。

『LOST GIFT』

喜々があらすじを読みながら言った。「確かに……これは連載向けだよねえ。うーん……」

天井を見上げて腕組みした喜々に、岬が不安そうに訊く。「おもしろくなさそう、ですか……？」

「いや」喜々は即答した。「あたしは好きだよ、いつもこの。内容も中高生向けだと思づ」

喜々は賛成の意を示しながらも、「ただね」と続けた。

「ただねえ……漫研の反対に遭いそんなんだよね、長期の連載になると。今回小説をお願いするのはさ、次の号に載せるはずだった漫研の作品が間に合ひそうもないからその穴埋めに、って目的だから。連載になると漫研のスペースを削ることになっちゃうし、もめ

「そうだなあ」

「…………ですか。すみません、わがまま言つちやつて」

岬は儂げな微笑を浮かべた。残念がる相方に自分も氣を落としながらも、凛子は思わずくらつとした。可愛い……どうして岬は男なのだろひ。

精神攻撃を受けたのは喜々も同じようだつた。呆けるように開いた唇の端からよだれが滴り落ち、ようやく固まつていたことに気付いたらしい。ハツとしてポケットからハンカチを取り出している。

「おっ、お姉さんに任せなさいつ、岬くん！　凛子ちゃんも！」

喜々はハンカチで口元を拭うと、向かい合わせの机に身を乗り出し、何事かと驚く二人の顔を交互に見やつた。

「『LOST GIFT』が校内新聞で連載できるようこ、あたしが手伝つてあげる！　部長権限で、ね」

【title・GW】

「ゴールデンウイーク三日目。岬と凜子は部室に集まり、それぞれの作業に没頭していた。窓の外からは野球部の威勢のいい掛け声が聞こえてくるが、聴覚から完全にシャットアウトされている。止まることなく鳴り響くタイピングの音は、さながらルロイ・アンダーソンの『タイプライター』のようで、文芸部の作業用BGMになっている。

いま岬が物語を書き、凜子がイラストを描いている作品は『LOT ST GIFT』。新聞部部長・喜々のささやかな権力だけで『ごり押し』することはできなかつたが、反対派には『NAMI-note』に掲載している作品を見せて承諾させたのだった。

漫研の反対は充分に予想されるが、それでも新聞部から許可が下りたのは岬たちの作品の方がクオリティが高いと見なされたからだ。自分たちのせいで枠が減つてしまつた漫研のためにも、よりよい小説を書かなければならぬ。

すでにプロットは完成していて、USBメモリにコピーして凜子と新聞部に渡してある。もちろん自分の手元にあるが、あまり必要はない。第一部完結までの流れはすべて頭に入っているからだ。アニメーションに変換して脳内で再生しつつ、それを文章で表現していく。

赤鬼の剛腕が打ち下ろした金棒を見上げて、野々宮は薄ら笑いを浮かべていた。「わらい、みんな……」

野々宮の最期の言葉は身体ごと押しつぶされ、剣戟けんげきの最中である

遊里^{ゆうり}には聞こえなかつた。地響きと、バキゴキという破碎音でようやく気付き、横目に見やる。そこでは、数瞬前まで快活な野球少年だつたモノが大地にのめり込んでいる。

うえ……と酸っぱいものが喉にこみ上げてきた。刀を握っていた両手から力が抜けて、膝がガタガタと震えだす。動きを止めた遊里に構うことなく、青鬼は無造作に蹴りを放つた。

「ぐふっ」

武骨なつま先が無防備な腹に突き刺さり、遊里は大きく弧を描いて吹き飛ばされた。手元を離れた刀はアニメのように地面に突き刺さる。ビクビクと痙攣しながら吐しゃ物をぶちまける遊里に、今にも泣き出しそうな愛紀^{あき}が駆け寄ってきた。「反町くん！」

「ツツ……卯月さん……逃げて……」

「反町くんも一緒に」

遊里は愛紀に助け起こされた。自分も血と吐しゃ物で汚れてしまふのを気に留める様子もなく、愛紀は華奢な身体で懸命に遊里を運ぼうとする。「今日はもう終わりよ。がんばって」

無理だ……。遊里は混濁した意識の片隅で思つた。僕はここでゲームオーバーだ。

ドンっ　と強く突き飛ばすと、愛紀は状況を理解していかつたらしく、え？　とこちらを振り返つた。だが、彼女と視線を合わせる前に、遊里の身体を衝撃が揺さぶつた。野々宮を殺した赤鬼に、金棒で右半身を殴打されたのだ。

全身が揺れる　身体中の内臓が、脳が揺れ、かすかに繋ぎとめていた覚醒の糸が途切れる。

「反町くんツ……！」

愛紀が悲鳴を上げたようだつた。きりもみして無様に落下し、野々宮だつた血だまりに転がつた遊里は、暗く閉ざされていく視界に愛紀の姿を映していた。何してるので、きみは逃げてよ……。

意識を失う寸前、愛紀が遊里の刀を振りかざしたように見えた。

タタンッ」と最後の『』まで勢いよく打ち終えて、岬は長い溜息をついた。校内新聞用に文章をいつもより削らなければいけないから難しい。椅子に背中を預けて天井を仰ぎ見た。凝り固まつた首をゆつくりと回してほぐす。

『タイプライター』がやんだことに凜子が気付いた。「……休憩?」

「ん。内容的にメンタルがつらくて」

「岬は流血苦手だもんね。あたしもだけど」

「ほんとはボクたち、『文学少女』みたいな話の方が向いてるんだよね……これ、ちゃんと面白いかなあ……」

「プロジェクトは面白かったよ。マンガの原作にも使えそうな感じで」席を立つた凜子が後ろに回り込んできた。パソコンを覗き込んで訊く。「どこまで書いたの?」「

「前からちょっとずつ書いてたから、今は三田田のクライマックス。野々宮がゲームオーバーして、遊里も追いつめられる。これから愛紀が『殺し』の才能を發揮するところ……」

「……ここ、絵にするの?」

「ん……倒された鬼たちの上で刀を見つめる愛紀が、田覚めた遊里に気付いて泣きそうになるところ……あの場面をイラストにして最後に載せたらかっこいいんだけどねー……」

「が、がんばる……」

凜子はむうと唸つて、それから画面の文章を読み始めた。頬にかすかな体温を感じてちらりと見ると、本当に同じ年か怪しく思える幼い横顔が至近距離にあった。かわいいな……妹がいたらこんな感じなのかな。

そんな風に思いながら横顔を見つめていると、不意に凜子がこち

らを向こうとした。反応が遅い岬に反して、凛子は圧倒的な速さで飛び退き不慮の事故を回避する。「なつなつ何つ？顔に何かついてる！？」

「んーん。かわいいなつて」

「ツツツ……ばか」

凛子は慌ただしく自分の席に戻るといつづせて、パソコンの向こう側に隠れてしまった。

「どうしたの」

「バカ岬！ 小説が好きなら気付きなさこよ」

「照れてるのもかわいいと思つよ？」

「わかつてゐなら言わない！」

凛子はガタツと椅子を蹴飛ばして立ち上がった。まだ五月になつたばかりなのに、首から上が真つ赤に火照つてゐる。遊里は穏やかに微笑んだ。

「凛子、リングみたい」

「……寒」

「そつかなあ」ギャグセンスの違いに首を捻つて、岬は思い出した

ように言った。「あ、そうそう、それで？ 文章どうかな」

「いつもの一人称じやないから変な感じ。ちょっと硬くない？」

「だね」

「つていうか三人称だよね？ それ。今まで『最高の一日』とかで三人称はあつたけど、なんか違う気がする」

さすがまりん 感心しながら岬はうなずいた。彼女の言うとおり、『LOST GIFT』はこれまでの三人称とは少しだけ違う。

ちなみに『最高の一日』は昨年度末に書いた小説の略称だ。岬は鞆から文庫本を取り出した。表紙にはクールな女性のイラストとモナ・リザが描かれている。

「この人の文体を参考にしてみたんだけど、なかなか上手くいかなかつて」

「……『万能鑑定士Qの事件簿？』……？」

「うん。松岡圭祐先生の『Qシリーズ』。キャッチフレーズは『人の死なないミステリ』」

「人が死ない……確かに岬が好きそうだね」

「つん。それでね、ウイキには? 一人称的三人称? って書いてあつた書き方をしてて 章ごとに人物の視点を定めるんだけど、基本的に三人称で、心理描写では一人称になるつていう……」

「……わかりやすくお願ひ」

「ええと……たとえばボクの『LOST GIFT』だと、ここに『遊里は〜思つた。僕はここでゲームオーバーだ。』」

「へえ……何かいいことあるの?」

「『Qシリーズ』を読めばわかるけど、読みやすくてテンポがいいんだよね」

まだ今までの癖が抜けきつておらず、目標には遠い。ゴールデンウイーク翌日には喜々に原稿のデータを渡す約束だから、そろそろ第一回目の原稿を完成させねばならない。だが

「もう十一時か……」岬は華奢な腕時計に目を落として言った。「ごめんね、凜子。ボク、今日はもう帰らないと

「えーっ? なんで?」

「お姉ちゃんが帰つてくるから、その準備」

慣れない文体による疲れを忘れて、岬はパッと表情を輝かせた。うつぶせていた凜子が顔を上げて一警し、溜息をついて再び突つ伏す。何事かぼそつとつぶやいた。「……システム……」

「? なに?」

「何でもないですよーっだ」凜子は身体を起こして「べーっ」と舌を出した。まったく忙しい子だ。

岬は小説を保存し、パソコンを閉じて鞄にしまった。凜子も紙と鉛筆を片付けている。

「凜子も帰るの?」

「何よ。悪い?」

「そうじやないけど、もう少し描いてから帰るのかと思つてたから

「だつて……ひとりで残つても、その……寂しいでしょ？」

なるほど。「だね。じゃあ駅まで一緒に行こつか」

岬と凜子は学校前のバス停でバスに乗り、駅に向かつた。町の中 心部へ向かう人が多いらしく席はほとんどが埋まっていたが、二人とも並んで座ることができた。凜子は妙に身体を縮めて頬を赤らめ ている。

『LOST GIFT』の展開について話し合いながら岬は思った。お姉ちゃん、凜子に興味あるみたいだつたつけ。せつかくだし、紹介しようかな……。

【 title5・GW=四月】（後書き）

『Qシリーズ』、『千里眼シリーズ』おもしろいですよね。
伏線ハンパない！

【作中作品紹介2・最高の一曰を過ぐすために僕がするべきこと】

題：最高の一曰を過ぐすために僕がするべきこと

作：波崎ナミ 絵：まりん

あらすじ：

ひとり暮らしの高校生・旅人は、いくつもバイトを掛け持ちして生活していた。唯一の楽しみはこつこつ増やしていく貯金だったが、使い道はまだ決まっていなかつた。

そんな旅人は一年生のある日、転校生・杏樹に一目惚れする。しかし杏樹は大手企業のご令嬢。一人はすれ違つてばかりで一向に进展できない。

だがやがて転機が訪れる。

杏樹の誕生日には毎年晩さん会が催されるため、一度も自由な誕生日を過ごしたことがないといつ。杏樹の願いを知った旅人は、最高の誕生日をプレゼントすると約束する。

その資金は、今まで蓄えてきた大切な貯金だつた。

作品情報：

『NAMI-note』に掲載されている短編小説。恋愛がメインだが、章ごとに視点の変更があるため三人称で書かれている。ナミが初めて書いた三人称小説。

「作中作品紹介2・最高の一回を過ぐすために僕がするべきこと】（後書き）

LOST GIFT はまた今度紹介しますね。

【title 6・渚】

渚と一緒に電車を降りたのは、部活帰りの男子高校生数人だけだった。ほとんどの客はあと一、二駅先で降りるのだろう。ここは地方都市の隣市の隣。高校まで過ぎた田舎町は、今でもやはり田舎のままだった。

改札を通り、夕空の下に出た。見慣れているのよつと広い空を見上げて伸びをする。

「んっ」

家まではタクシーで帰らなければならない。斜め前で少ない客を待っていたタクシーの運転手は、渚のことをまじまじと見つめる。なんとなくそのタクシーを選んだ。着替えとお土産が入った鞄をトランクに閉まい、仕事の時にもうつたブランド物のハンドバッグだけを持つて後部座席に乗り込む。

運転手に行き先を伝えてから、スマホを取り出した。メールを作成する。『いま駅に着いたよ』

「お客さん、大学生？」

「はい。休みをもらえたので、弟に会いに」

「休み？」初老の運転手はミラー越しに渚を見た。「……ああ。学生ならサークルかバイトかな」

「ん……バイトっていうか、一応仕事なんですけど。モデルの『モデル！』ははあ……どうりで伸びをする仕草も様になってるわけだ」

なるほど、さつき私を見てたのはそのせいか。渚は勝手に納得した。饒舌に語る運転手に得意のスマイルで応じながら思つ。容姿に恵まれたのは幸運だったが、いいことばかりでもない。他人からはいつだって色目を使われるし、自分と反対の人間からは妬まれ、非難の対象になるのだ。

とはいえ、そんな苦難も自分が味わうなら我慢できる。だが

自分の田が届かないところで、最愛の弟も同じ辛苦を味わうかもしれないと思つと、ゼリも仕事も放り出して田舎に帰りたいという衝動に駆られることがしばしばだ。

「ホールデンウェイーク三日目にして、ようやく会って来れた。この田をどれだけ待ち望んだことだろ？」

今年で二十一歳になる名波渚は、弟の岬を世界で一番愛している。

駅からタクシーに乗つて一十分ほどで実家に着いた。バッグから取り出した鍵で玄関を開けるが、きちんとチーンがかかっている。岬が言いつけどおりに戸締りしていることにほつと安心して、渚はドアの隙間から屋内に呼びかけた。

「みさちやーん！ ただいまー！ おねえちやんだよーっ…」
すぐに廊下をかけてくる足音があつた。が、途中で勢いよく転んだらしく「あうっ」と悲鳴が聞こえる。渚も違う悲鳴を上げた。「みさちやんー？」

「いたた……」よりよりと立ちあがつた岬がチーンを外した。「おかえり、お姉ちゃん」

「大丈夫みさちやん怪我はない！？ ああっ、おでこが赤くなつてる……！」

渚は再会の瞬間に岬をぴつたりと抱き寄せた。大切な弟が怪我していないか、自分の田で全身をくまなく確認し、あちこち撫でくり回す。

「お、お姉ちゃん……」姉の過保護に慣れてるとはいえ岬も恥ずかしいようだった。抗議の声は尻すぼみに消えていく。「うう……恥ずかしいよ……」

渚は恥ずかしかったんだ岬の瞳に気付いた。「どこが痛いの…？」

？」

「だから……そりゃなくて……」

「お姉ちゃんが？ 全身隈なく？ 聽てあげるね。わ、お風呂に入ろうつ

「ま、待つて……ボクじゃ突っ込みきれな ッツー? ビニ触つてるのお姉ちゃん! !」

姉弟のスキンシップを心行くまで楽しんだ後、渚は岬と一緒に夕食を食べていた。家事スキルが非常に高い弟の料理に舌鼓を打つ。

「んつ。おいしー」

姉の素直な感想を受けて岬は照れくさそうにはにかんだ。「ありがと。頑張つてよかつたあ」

「みさちやん、また料理が上手になつたよねえー。これならビニでもお嫁に じやなかつた、お婿にいけるよ。お姉ちゃんが保証する」

「ええー、大げさだよ」

「それともお姉ちゃんのアメになる? むふふ

少し酔いが回つた渚の誘いを岬は真に受けた。岬は当然酒を飲んでいないのに、日焼けを知らない頬は酔つたように赤く染まる。きょろきょろと視線を泳がせながら、両手でくるくるとフォークをもてあそぶ。皿中のカルボナーラが巨大などぐろを巻いていく。

「んん……ど、どうしよ……お、お姉ちゃんがいいなら、ボクは……」

「あは。『冗談だよ』」

「! もうつ……からかわないでよ」

「『めん』めん。 でもせ、みさちやん。高校に入つて一ヶ月でしょ? どう? 彼女とかできそう? ん?」

姉として心配なことベストスリー。岬の健康と安全、それから恋愛だ。

見る者の保護欲をかき立てる岬のことだから、きっと妹や弟的存在として認識されるのが大半なのだろうが もし、「男でもいいか……」とストライクゾーンを広げた野獣がいたとしたら そう考えると渚は居ても立つてもいられない。

岬には、守ってくれる人が必要なのだ。

「気になる子はいないの？ 可愛いくて強くてしっかりしてる子！」「かわいい子なら、たくさんいると思うよ……？」けど、みんなただの友達だし、付き合うなんて考えないなあ

「じゃあさ、この前電話で話してたあの子は？ けつこう意外な出会いだつたんでしょう？」

「意外だつたけどそんなに驚かなかつたし……凛子とは、お姉ちゃんが言うような関係にはならないんじゃないかな。これからも仲がいい友達のまま、一緒にラノベを作つていけたらそれでいいと思う」「……そつか。だつたら、まだお姉ちゃんのみせちやんでいてくれるね。よかつたー」

「えへへ……」

大きな目を細めてもじもじする岬を優しく見つめながらも、渚はやはり心配だつた。岬がただの友達だと思つていても、相手 凜子はどうかわからない。聞いたところによると文芸部では一人きり、クラスも同じで、帰りは駅まで一緒だという。岬はこんなにもかわいいのだから、ずっと一人きりでいて凛子が落ちないわけがない。

そもそも岬は感受性が高い割に、人を疑うといふことを知らなすぎるのだ。

夜十時。

岬に会わせていつもより早めにベッドにもぐつたため、渚はなかなか寝付けずにいた。渚と岬はひとり用のベッドに一人で寄り添つている。もし岬が寝てしまつていっても起こさないように、小声で呼ぶ。

「みせちやん、起きてる？」

「…………ん やや間があつて、眠たげな声が聞こえてきた。「なあに？」

「「めんね、もう寝てた？」

「んー……眠りかけだつたかも。お姉ちゃんは寝れないの？」

「うん。隣にみさちやんがいるからドキドキしちゃつて」

「ええっ……」

「冗談だよ」岬の方を向いて、華奢な身体を抱き寄せた。シャンプーの香りがする柔らかな髪を指すべく。「背伸びたね」

「ボクだつて高校生なんだから、当たり前でしょ。お姉ちゃんもすぐ追い抜くよ？」

「だといいけど。そのときには、もうちょっと大人びてるのかな。彼女もいるのかな？」

胸元で岬がくすくすと笑つた。「またその話？　お姉ちゃんぜつたい酔つてるでしょ」

渚は岬の頭を撫でていた手を徐々にずらしてこき、背中にまわした。その手にぎゅっと力を込める。密着した岬の体温が、薄手のパジャマ越しに伝わってくる。

「みさちやん、前より体温上がつたね。身体が丈夫になつてきた証拠かな」

「体温つて……そんなことわかるの？」

「わかるよー 私がどれだけみさちやんを抱いてきたと思つてるの」

「そのセリフは誤解を招きそうだね……」

苦笑する岬の耳たぶが、こぎりに唇を寄せ、そそやく。「誤解されちゃ嫌？」

「ひゃんっ！？」

「……むふふ」

目がだいぶ暗闇に慣れている。上田づかいに抗議の視線を向けてくる岬を見返した。

「いつも一緒にいたらいんだけどね」

「いつも貞操が危ういけどね」

「これは真面目な話だよ、みさちやん。昔から、みさちやんは身体が弱かつたでしょ？　だいぶ健康になつたけど、お姉ちゃんは心配

なの。大学も仕事もサボつて帰ろうかなって、真剣に考えるくらい」「心配し過ぎだよ」

「そんなことない！」感情が突沸した。「みさちちゃんがいなくなつたら、私、どうすればいいの！？ 勉強する意味も、働く意味も失くなつちゃうよ。いなくなつちゃやだよ……ずっと一緒にじゃなきゃ、いやだよう……」

急に声を上げて泣き始めた渚に抱きすくめられ、岬は困惑してい る。だが、どうしたらいいかは分かつてないようだつた。子供のように泣きじやぐる渚は、逆に岬から抱きしめられた。よしよしと頭も撫でられる。

岬はいつもと変わらない穏やかな声で言つた。「ちょっと、お酒飲みすぎちゃつたね」

「……みさちちゃんに、会えて……うえつ……うれしかつた、から……」

「そつか。 ボクもね、お姉ちゃんがいなくなつたら嫌だよ。だけど、泣かれちゃうのも嫌だな」

「……うん」

「今日はもう寝よつか。一人で眠るんだから、きっとここの夢が見れるよ」

翌日、「ゴールデンウイーク四日目。渚と岬は電車に乗つて、岬が普段利用している駅で下車した。都会ほど混んでいるわけではないが、地元に比べればだいぶ人出が多い。背の高い建物が多いし、車の往来も激しい。

岬が暮らすには空気が汚れ過ぎている気がする。やつひつてみたが、岬は「心配性だなあ」と微笑んだ。

「学校にいる間だけだし、最近は体調を崩す」とも少ないのでから平気だよ

「事故に遭つたら……」

「そんなこと言つたら外出できなによ?」

「……むー」

本心から納得はできなかつたが、渚は気分を切り替えることにした。せつかくの『ティー』を楽しむわけがない。次に会えるときまでの元氣を蓄えておかないと。

映画を観て、『』飯を食べて、買い物をして それから一人はバスに乗つた。岬に案内されて着いたのは晴香学園はやか 岬が通つている高校だった。

「私も入つていいのかな」

「野球部とバスケ部以外にはほとんど来てないはずだから、先生たちには見つからないよ。大丈夫」

昇降口は開いていた。岬は自分の上履きを履き、渚は来客用に用意してあるスリッパを拝借した。

小奇麗な校舎内を岬について歩いていく。階段を三階まで上つて廊下に出ると、左手には美術室が、正面には小さな部屋があつた。プレートには『文芸部』と書いてある。

中に入るとすでに人がいた。小柄な女子生徒で、ツーサイドアッシュにした髪が幼い顔立ちに似合つている。岬が彼女を呼んだ。「凛子」

「あ」ようやく姉弟に気付いたらしく、凛子はパソコンの画面から目を離し、こちらを見た。「遅かつたじゃない。……ええと、そちらがお姉さん?」「

「ん。 お姉ちゃん、この子が凛子」

「はじめまして、凛子ちゃん。いつもみわたちゃんがお世話になつてます」「い、いえつ……！」 じつはじつはお世話になつてまひゅ なつてますツ」

かわいい。

岬が言つていた通り、かわいい女の子だった。小さくて幼くて、

岬と同い年だと聞いていなければ、セニゼー中学生にしか見えなかつただる。これが合法口りといつやつか。

「……どうしました？」

「ハハハ。みわちゃんの？ 友達？ がいに子だつてわかつたから、安心したよ。これからもみわちゃんのこと、よひしへ、凛子ちゃん」

一瞬きょとんとしたが、凛子は妙に緊張した様子で答えた。「は、はい！ 岬のこと任せてくれさい！」

この後、渚は文芸部の穏やかな活動を見守つて満悦だった。まだまだ岬が自分のもとを離れることはなさそうだ。凛子は岬を押し倒したりするような肉食系ではないし、何より、岬は年上が好みだから。

ちなみに、『NAMI-note』とは口り要素メインの小説がない。

【title・渚】（後書き）

なんか迷ひみつてまじなかつたです。
三千文字代くらにしたいんですけど、難しいです↑↑↑↑↑
たぶんそのうち書き直します

【title7・連載開始】

放課後、運動部たちが出ていった後の教室。

席に座つて帰り支度をしつつ、相変わらずにやけている羽淵が言った。「けつこう面白いんじやないの？」

「もつと素直に笑えないの……」

「なんだよ岬。俺が褒めてやつてんだから、細かいことは気にすんな」

「んー……読んでくれてありがと。でも急いで読まなくたって、家に帰つてからゆっくり読めばいいのに」

「はんっ。俺には家で読書なんかする暇はないんだよ。それに、面白いって言つたら。テンポ良く読めたし、続きも気になる」

「ほんとに？」

校内新聞を適当に折りたたみながら、羽淵は頷いた。より一層にやけたのは照れ隠しだろうか。

「でも、よかつたあ」友人の高評価にひとまず安心して、岬はほつと息をついた。「ボク、昨日は緊張して眠れなかつたんだよ」

「寝不足で倒れんなよ」

「ハブツチつて優しいよね」

「……まあな」

表情筋が限界になつたらしく、羽淵はそれ以上にやけはしなかつたが、代わりに唇をへの字に曲げた。眼鏡の奥の目が宙を泳いでいる。岬には照れているのがお見通しながら、黙つておくことにした。

今日・五月の第一水曜日は、『LOST GIFT』連載第一回が掲載された校内新聞の配布日だつた。

朝のホームルームで配布された校内新聞『サニー・サイド・アップ』は、今年度二回目の発行。名前は『アップ』ではなく『アッフル』で、ロゴマークは太陽の横にリンゴが描かれた絵だ。

主な内容は、中間テストに向けた各科目・各学年の問題予想。それから各部活動の紹介と、文芸部の紹介を兼ねた『LOST GI FT』。ヒロイン・愛紀を主人公の遊里が後ろにかばい、刀を構えているイラストの傍らには、『文芸部設立記念作品 連載開始!!』の文字。

「しつかしまあ、佐久間つてこんなに絵がうまいんだな」

「でしょ！ 本当はバトルもの得意じゃないのに、これだけのイラストを描けるんだよ！ すごいよね！」

「お前、うれしそうだな」

「当たり前でしょ。ずっと一緒にラノベを書いてきたんだから」岬が立ちあがり、小さく胸を張つてみせると、腰に当たた手を何者かが引っ張つた。岬は簡単にバランスを崩してよろめくが、強引に手を引かれて連れ去られる。

「ちよ、ちよっと凜子！ いきなり何

「部活行く岬……！」

教室を出るとき、凜子と仲がいい女子たちが微笑んでいた。お熱いね、新婚さん。

実は最近、部活に行くまでこの流れがテンプレになりつつあつたりする。

初めてのようだれることはなくなつたものの、部室までのダッシュは岬にとってハードな運動だった。ようやく部室の前で立ち止まり、両膝に手をついてうつむく。

「うつむかないで、顔を上げて」あまり疲れた様子のない凜子が岬に寄り添つた。「うしてると灰がつらいから、まっすぐしないと」

「そ……それより、早く部室を開けて……もつ立つてられない……」懇願されて、凜子が鞄から部室の鍵を取り出した。解錠して、岬を支えながら中に入る。

その背中を呼び止める声があった。

「きみたち」

妙に鼻にかかった男子の声。部室に入つてすぐ一人が振り返ると見知らぬ男子生徒が立つている。ネクタイが灰色がかつた緑色だから三年生だ。イケメンではないが、優等生然とした教師受けがよさそうな少年。フレームが太い黒ぶち眼鏡をかけていて、少なくとも羽淵よりは似合っている。

彼は手に持つていた『サニー・サイド・アップル』を見せてきた。

『『LOST GIFT』、小説も絵もきみたちが書いたんだよね？』

『面白かったよ』

息を切らしてこる岬の代わりに凜子が答えた。『ありがとうございます……』

『います……』

たむらひでじ

田村博士

とくづ

博士と書いて『ヒロ

シ』だ、よんしぐ

『はあ……えっと、私がイラストの佐久間凜子で、こっちが小説担当の名波岬です』

『ふうん。『やくまつん』の三文字で『まりん』……『なみさきなみ』は『ななみみさき』のアナグラムだよね？』

『……そうですが』

『やつぱりそうか！』田村は誇らしげに声を張つた。『実は僕、推理物も好きでね。こうこうことには頭が回るんだよ』

『……へえ、そうですか』

凜子が醒めた声で受け答えしている。いい加減岬は座りたいのだが、まだ話は終わらないのだろうか。そう思つてると、凜子はひとりで喋つている田村をおいて奥へと歩いていく。岬はいつも席に座らされて呴いた。ありがと……。

どういたしまして 凜子も呴き返して、部室の入口へ戻つてい

つた。話を無視されたことが気に障つたらしく、田村が鼻にかかつた声で言つ。『なんで無視するんだい』

『無駄話が長かったので。もうちょっと他人を気遣つたらどうです

か

「ふん。僕が話したいのはきみじゃなくて彼女　彼？　なんだが。
中に入ってくれるかい」

「あたしが岬の代わりです。用件は何ですか

「きみに言つていいいのか、優しい僕は迷うんだが」田村は不遜な態
度で凜子を見下ろした。「『LOST GIFT』は面白い

「……ありがとうございます」

「まあ話は最後まで聞きなよ。あれは面白い。連載一回目だけでも
わかる、引き込まれる。だが、だからこそ、スペースが足りない校
内新聞なんかで連載するべきじゃないと僕は思うんだよ、うん」
岬は後ろから様子をうかがつていて、凜子の小さな背中が小刻み
に震えていることに気付いた。笑っている　わけないだろう。お
そらく苛立つている。

岬の予想通り、凜子は尖った声で言った。「漫研のスペースを確
保するために、『LOST GIFT』はネットで連載しろってい
うんですか」

「だから最後まで聞けと言つてるじゃないか。いいかい、そもそも
あの作品はきみの　まりんの画風にマッチしてない

「あたしのほかに誰が描くって　」

「僕だ」田村は聞く者の神経を逆なでする喋り方をする。「漫研部
長のこの僕が、『LOST GIFT』をコミカライズしてあげよ

う……！」

ズドンッ

激しい騒音とともに部室のドアが閉められた。我慢の限界に達し
た凜子が田村を完全に拒絶したのだつた。小窓の向こう側では、理
知的な少年が眼鏡の奥の目をぱちくりと瞬かせている。

なかなか立ち去らない田村に向かつて凜子が吠えた。「さつさと
帰つて！」

「ツ……先輩にタメ口か。ふんつ……僕の方が『LOST GIFT

「『にふさわしいって、すぐに思い知らせてある』

「黙つて消えなさいよッ……！」

一回田の叫びで、田村はようやく引き返していった。凛子を心配した岬が席を立ち、声をかける。「凛子……大丈夫……？」

「つ……何が」

「その……すゞぐ、機嫌が悪そつだから……」

「当たり前じやない！」まだ腹の虫があわまらないらしく、凛子は今にも噛みつかんばかりの様子だつた。「アイツ、勝手なこと言つてつ……あたしの絵が合わないから、だから譲れつて？ アマチュアレベルの画力しかないくせに、ヒラヤリ『ミミカライズしてあげよう』なんて言つてんじやないわよ……」

「凛子……ボクたちもまだアマチュア……」

「あたしたちの方が上じやない！ ミミカライズつて言つてたけど、それはアイツが自分で話を作れないから、岬を原作にしたいってことでしょ？ それに、あたしも一枚絵なら絶対に負けないのに……なんであんな風に見下されなきやいけないのッ」

「凛子の言つことも分かるけど……とりあえず、落ち着くつよ。ね？ そんなに怖い顔してちや、かわいい顔が台無しだよ」

「…………ッ」

凛子は両頬をぷにっとつままれて、よりやく口をつぐんだ。ヒートアップし過ぎるあまり涙が浮かんだ瞳が岬を見上げる。岬はそのままを見返すと、？いつも通り？を心がけて柔らかく微笑んだ。

「…………めん。我慢、できなくて」

やがて凛子はバツが悪そうにうつむいた。「気にしないで」と励ます一方で、岬はひとまず安堵の溜息をついた。凛子がこんなに怒ったのは、メールだけのやり取りの頃はもちろん、高校に入つてからも初めてだ。怖かつた……。

しかし、とりあえず一件落着。田村の捨て台詞が気にならないこともないが、気を取り直して、今日もいつも通り平穏な部活動になることを期待する

「こんちわー！『ロスギフ』好評でウハウハだねえーつー人とも！」

そんな岬のささやかな願いは、陽気な新聞部部長によつてすぐ打ち砕かれた。

【title 8・美術部】

「こんちわー！『ロスギフ』好評でウハウハだねえーっ一人ともー！」甲高い声が狭い部室にこだました。岬と凛子はびくつと入口を振り向く。『新聞部』の腕章を着けたボブカットの女子生徒が、満面の笑みを浮かべて駆け込んでくる。

喜々は岬の飛びつくと、細い首に自らの腕をまわした。柔らかなものを岬の後頭部にぎゅうぎゅう押しつけながら言つ。

「部長の権力振りかざして正解だつたよ。マンガとかラノベが好きな子たちから結構反響があつてねえ、早く続きを読ませろだつて。よかつたね二人とも！ 好発進じゃん」

「き、喜々さんっ……！ あ、当たつて……いか苦し……」

渚以外の女性に密着されてうろたえる岬は、殺氣を感じて対面の席を見やつた。ようやく落ち着きを取り戻しつつあつた凛子が、眉根を寄せてこちらを睨みつけている。怒りが再燃した理由を知る前に、岬はまず語りかける。

「ねえ凛子、いろいろしてるのは分かるけど、せつかく喜々先輩が褒めに来てくれたんだから……」

「バカ岬！」

凛子は乱暴に椅子を蹴つて席を立つた。岬が重ねて呼びかけるが、ふいっと顔をそむけて、開け放たれたドアへ歩いていく。

「凛子っ……どこへ行くの？」

「トイレッ」

小柄な背中がツーサイドアップの髪を揺らして部室を出していく。それを見送りながら喜々が訊いてきた。「なんで怒ってるの？」

「さつき漫研の部長さんが来て、凛子を怒らせちゃつて……」

「田村？ そういえば、ここに来る時すれ違ったつけ。今度うちの部室に抗議に来るつてほぞいてたなあ。ああいつ男つてどうみ、岬ちゃん。あたし、ナルシは絶対無理だわ」

「でも、十人十色つていうし……嫌いな人でも、悪く言うのはよくないと思います。自分とそりが合わないだけで、田村さんのことが好きな人もいるかも知れないじゃないですか……」

「…………」

「……喜々先輩？」

「なんて優しい子なの！」喜々は岬に頬ずりまではし始めた。「岬ちゃんマジ天使！」

「『Angel Beats!』ですか……あと、苦し……」

「いやふふ。凛子ちゃんがいないうちにイチャイチャとかなきやねえ。すねてる凛子ちゃんもかわいいけど」

耳元でキンキン鳴り響く歓声と、頭に押し当てられているモノの感触、それから首を軽く絞めてくる腕 岬はすでに昇天しそうだつた。性的な意味でなく、生命の終末的な意味で。

お姉ちゃん……助けて……。

川の向こうで亡き両親が手招きしている光景が、霞んだ視界と入れ替わるうとした時、

ズドンッ

部室のドアがまたしても悲鳴を上げた。

今度は思い切り開け放たれた音だった。凛子が戻ってきたのだろうか。それにしては早すぎるが……。

岬の首を絞める力がふつと緩んだ。せき込む岬の代わりに喜々が訊ねる。「誰？　きみ」

「美術部つすけど、不純異性交遊ならホテルでやつてくんないすかね？」

短髪をワックスで逆立てた不良顔の少年が、悪魔も逃げ出しそうなほど凶悪な表情で仁王立ちしていた。バスケ部ほど大きくはないが、充分に立派な体格をしている。体育会系の印象がある「つす」という喋り方のせいもあって、あまり美術部員らしくない。

「あはっ。きみ美術部つぽくないねえ」

「喜々先輩……ツ」

岬が思つても言わないようなことを、喜々は平然と言つてしまつた。……用法間違つてゐる氣がするけど、『喜々の口戸』は立てられない』

当然の『ごとく不良（？）』美術部員は癪しゃくに障つたようで、ギリギリと奥歯を鳴らしている。

「さつきから五月蠅いんすよ、あんたら。俺たちの準備室を借りて成り立つてる弱小部のぐせに、隣でわーぎやー騒さわぎやがつて」「い」「ごめんさい……」

相手の威圧感に気圧されるまでもなく、岬は素直に頭を下げた。大きな音や怒鳴り声は人を委縮させる。特に感受性が高い岬には、他人の怒りに触れるのはとても恐ろしいことなのだ。

しゅんとうな垂れた岬の魅力に？ やられ？ て、こわもての美術部員は「うぬっ」と呻いた。男子の制服を着ているから性別は分かるはずだが、だからこそ精神的にくるのかも知れない。

「とつ、とにかく！ もつ騒がしくすんじゃねえぞ、わかつたか！

！」

「一つお伺いしてもいいかしらん？」余裕な態度を崩さない喜々が言い返す。「ひとつ、いつのまにか完全なタメ口になつてゐる件について。ふたつ、きみの方が騒がしい件について」

「ツ……んだとこの 痛つ！？」

喜々に挑発された少年が部室に踏み込もうとするが、脳天に手刀を食らつて立ち止まつた。「誰だ」と勢いよく後ろを振り返り、またしても静止。「……ぶ、部長……」

チョップしたのは、艶やかな長い黒髪の女子生徒だつた。リボンの色で三年生だと分かるが、同い年の喜々よりも大人びた印象がある。高校生にしてはかなりプロポーションが良く、顔立ちも整つている。大人と子供の中間特有の魅力を持つた美少女。

岬は彼女と面識があつた。美術部部長・佐々木優生。

優生はチョップの形にしたままの手を男子部員に向けていた。「

喜々が言うとおり、騒ぎ過ぎだよ。幹太くん

「でも部長！ こいつら五月蠅かつたじゃないっすか」

「『田には田を』？ そんなのはおかしいでしょ」

「部長」

「めつ」幹太の額をペチンとはたいて、優生はお姉さんらしく言った。「私が代わりに話としてあげるから、幹太くんは美術室に戻りなさい。部長命令です」

優しく言いつけられた幹太は、なぜか頬を赤くした。顔に似合わず「あう」とうろたえ、大人しく退散してしまつ。「わかりました……部長が言うなら……」

幹太が美術室に戻つていくと、優生は岬を見た。一人の田が合つ。「ごめんね、岬くん。怖かつたでしょ」

「そんなこと……」つい見栄を張るうとするが、優生はこちらの胸の内を見透かしているように笑つてゐる。「……はい。怖かつたです……」

「正直だね。でも、幹太くんは岬くんより年下だよ？ 中等部の二年生」

「えー？ あの坊や、あたしにタメ口どじろか命令口調だつたじゃん」

喜々が唇を尖らすが、優生は優しく微笑むだけだつた。「大目に見てあげてよ。それに、文芸部が騒がしかつたのは事実でしょ？」

「ごめんなさい……」

岬は今度も素直に謝つた。だが、代わりに喜々が弁明する。

「あたしが岬くんと戯れてたのは、あたしの責任だけどさあ。その前にうるさかつたのは田村が悪いんだよ、ヘタ村が」

「田村くんが？ どうして」

「ほら、あいつって真面目そうだけどバカじゃない。凛子ちゃんを怒らせちゃつたらしくてさー」

「あたしがどうかしました？」

凛子がお手洗いから戻つてきた。入口の辺りに立つてゐる優生に

頭を下げる。

「美術部の部長さうですね。部屋、本当にありがとうございました」

た

「別にいいよ。たいして使ってなかつた部屋だから、気にしないで。ただ、あまり騒ぐのはやめてね」

「あ……さつきの……ごめんなさい」

「だから気にしないでつてば」

優生は繰り返し頭を下げる凜子にも笑いかけた。薄桃色の頬に笑え
窪くぼが見られる。

やっぱり、そつくりだ。

岬は心優しい美術部部長をぽつと見つめていた。時折優生も岬のことを見て、彼女の特徴である優しい笑みを浮かべていた。

しばらく談笑して、嘉々と優生がそれぞれの部室に戻つた後。岬は小説を書かずに『NAMI-note』を見ていた。いつもの『タイプライター』が聞こえないで、すぐに凜子が気付く。「何やつてるの?」

「ん?『パーフェクト・スケッチ』を読み返してる」

「『P·S』? ああ、伏線の確認?」

「ううん。本編の伏線はほとんど回収し終えたし、残りは番外編で書くから……」

凜子も作業の手を止めた。「じゃあ何

「んんー…………聞いても笑わない?」

「事と次第によりけりだけど」

「……じゃあやめとくよ。また今度話すから、それまで忘れてて」「えーっ? 何で、教えてよ」

凜子は何回か理由を追及してきたが、岬は笑つてしまかした。

【 title 8 · 美術部】（後書き）

ねもい…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5562z/>

ナミノート NAMI-note

2011年12月31日16時02分発行